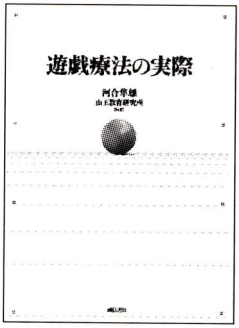
# 河合隼雄・山王教育研究所　編
# 『遊戯療法の実際』

（誠信書房・二〇〇五年六月）

松本　知子




本書は、遊戯療法についての総論と、山王教育研究所のスタッフによる八つの遊戯療法事例論文に河合隼雄が一つひとつにコメントを加える形で構成された内容となっている。一九七〇年に設立され、三五年にわたって心理療法の実践と研究を行ってきた山王教育研究所の代表に河合が一九九八年に就任した流れの中で、本書の計画は立てられたそうである。「遊戯療法に関してまだまだよい本が多くない」日本の現状を変えようという非常に意欲的な言葉のもと、質的に高く、しかも読みやすいものを目指して何度も原稿に修正を重ね、なんと七年という歳月をかけて編み出されたものだとのことである。

総論では、弘中正美が「遊戯療法とその豊かな可能性について」と題して、そもそも遊戯療法とは何なのか、その位置づけ、遊戯療法を開始する際の準備といったことから、アクスラインの八原則や制限について、遊戯療法における治療メカニズムとして遊びのリアリティ、遊びの非言語性、遊びの非現実性（先の遊びのリアリティと矛盾する言葉だが、生き生きとした遊びの体験を子どもはするが、それは主観的・内的な世界におけるリアリティであって、現実そのものではないとのこと）と「遊びに収まる」ことという、遊びのもつ三つの特性についても論じている。また、遊戯療法は奥行きの深い心理療法であり、それ故にその可能性を十分に生かすためには相当の経験を要求される難しい心理療法であるが、初心のセラピストがしばしば優れた仕事をするという、一見すると矛盾するようなことが多々起こっている事実にも着目して述べている。詳しくは本書を読んで頂きたいが、遊戯療法とは、この様にアンビバレントなものが多層的に絡まりあった世界と言えるのではないだろうか。

事例論文では、場面緘黙児の箱庭とプレイセラピーの事例や、学校での問題行動によりプレイセラピーが行われた事例、プレイセラピーにおいて激しい攻撃性が出された事例、プレイセラピーを取り巻く幾つもの三角関係の布置が見られた事例、養護施設で生活している子どもの事例や、全プロセスをボールのみを使って遊んだ事例等のように、切り口も多彩な事例が並んでいる。一つひとつを自分がセラピストでその場にいるならどう反応するか等、思い思いに味わいながら読み進めていけるように思う。事例の最初に載っている大場登の論文は一九七八年に発表された論文の再録とのことだが、私は不勉強なため読んでいなかったので、今回を機に読むことが出来て非常に嬉しく思った。終結の際に卒業証書を渡すというやり方にも感激した

（余談ながら、他の事例でも同じやり方をしているものがあったので、ひょっとしたらこの論文が読み継がれていて、山王にはそういう伝統のようなものがあるのかなと推察してみたりもした）。また、それぞれに考察もなされており、その上更に河合のコメントもあるので、至れり尽くせりな内容となっている。私は事例だけでなく、河合のコメントを読んでいる際にも自験例がしばしば浮かんできた。そして、本書の醍醐味は、それぞれの論者がどう感じていたのか考察を読んだ上で、更に河合がそれぞれの事例を土台としながら論じている、遊戯療法の本質についても学ぶことが出来る所にある。

遊戯療法はしばしば何が行われているのか、そこで生じていることの意味をセラピストが掴みきれていない中で、展開が起こっていたりする。恥ずかしながら私もその一人であると断言出来る。本書を読んでいる最中、同時に自験例についても思いが湧き上がり、起こっていることの意味を考えていく時間にもなった。本書は遊戯療法を始めようとする初心のセラピストから、日々ケースに追われているセラピストにとっても一つひとつの事例の意味や、心理療法の本質についてじっくり考える一助になるのではないだろうか。

（まつもと　ともこ・臨床心理学）